くまにち論壇

慶応大大学院教授
蟹江 憲史

かにえ・のりちか　専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs（持続可能な開発目標）」など。52歳。

# 東京五輪 新型コロナ

## 本気の反省と行動が必要だ

東京五輪が終わった。果たして五輪は日本に何を残したのだろうか。終了後にきちんと振り返り、反省すべきは反省することが、より良い未来に向けて不可欠だ。

まず考えるべきは、日本における新型コロナウイルス感染者急増との関係だ。政府をはじめとした関係者は五輪とは無関係だと主張するが、そう言い切れないのは明白だ。

五輪開催と並行して感染者の増大が起こった。そこには相関関係があっても、因果関係があるとは限らない。だが、開閉会式における会場周辺の人流の増加や、一部競技での路上観戦者の多さ、オリンピックがもたらす高揚感が人々の気持ちや行動を外向きにしたことも、垣間見えた情報から明らかだ。デルタ株の強い感染力、そして、人流の多さが感染を広げると常に言われてきたことを重ね合わせると、両者に因果関係があると考えるのが自然だろう。

改めて浮き彫りになったのは、科学に基づいて状況を分析した上での事前の準備やプロセスが極めて重要だということだ。本気で開催する気があったのであれば、事前に徹底的に感染者を減らす政策を取るべきであったし、それができないのであれば中止すべきであった。開閉会式で繰り返された、逼迫する医療関係者への感謝の言葉が上滑りに聞こえたのは、私だけではないだろう。

当初掲げられた「復興五輪」は影を潜め、被災地での競技は五輪前半で終了した。もう一つの「持続可能性」の旗印もいつの間にか消え去った。弁当13万食が廃棄されたとの報道はこれを象徴するものだった。持続可能な開発目標（SDGs）の達成を本気で目指していたのならば、起こりえなかった話である。

東京五輪に関する物資調達のよりどころとなる「持続可能性に配慮した調達コード」も、その設定段階から、ロンドンやリオの五輪と比べても不十分だと批判されてきた。最近では環境保護団体が、国立競技場に使われた木材が調達基準に違反している可能性を指摘している。今回のメダルがリサイクル素材から作られたのは一つの実績だろう。それでも、こうした取り組みを支える大事な理念が、大会全体に広がらなかったのは残念だった。

最終的にクローズアップされたテーマは「多様性と調和」であった。確かに組織委員会は森喜朗会長の辞任劇以降、女性委員が増えたし、開会式には多様な人々が登場した。しかし、制作・演出の統括役が多様性を認めない過去の言動で解任されるなど、直前まで「多様性と調和」が本気で実行されていないことも露呈した。果たして日本は、東京五輪の経験を一過性で終わらせず「多様性と調和」を認め合う社会となり得るのか、今後の動向を注視する必要がある。

「参加することに意義がある」という五輪の理念が実現できたのかどうかも重要な視点だ。例えば、念願の金メダルを取った野球の参加国はわずか6カ国。半分の国がメダルを獲得した。関係者によると、野球に限らず参加国が少なかった原因の一つには、地区予選ができなかったこともあるそうだ。また、出場できたのは、コロナ禍にあって選手をそろえられる国に限られた感があったという。参加さえかなわなかった人々がたくさんいたことも、記憶にとどめておかなければならない。

そうした中でも、可能な限りでアスリートが集まり、競える場を提供できたのは良かった。ただ、「場」を用意する側が「やっておくべきだったがやっていない」ことがあまりにも多すぎたと感じる。

その最たるものの一つが、1569億円を投じて整備された国立競技場について、今後の活用方法を決めないままに使い始めたことだ。まさに持続可能性を本気で考えていないことの表れだ。競技場は7万人近くを収容可能だが、五輪は観客を入れることなく幕を閉じた。球技専用に改修する当初計画を覆し、陸上競技場としての存続が検討され始めたという。その維持費は年間24億円といわれる。

東京五輪が未来にとって価値のある存在になるには、ここからの本気の反省と行動が必要だ。